

徳元年譜稿

— 寛永三年春 —

安藤 武彦

寛永三年（一六二六）丙寅 六十八歳

○正月、徳元、若狭国より国主京極忠高（卅四歳）に扈從して入洛す。文事応接の係を勤めるためであろう（木村三四吾氏論考）。思うにそれはこの年六月に大御所秀忠、八月に將軍家光がそれぞれ上洛。忠高も京師において右近衛少將に任ぜられた。九月には後水尾院が中宮徳川和子（忠高夫人初姫の同腹母妹）ならびに皇女一の宮らをとまない二条城へ行幸せられるなど（古活字板・絵巻『寛永行幸記』に評述）の慶事に関連して、（註）朝幕間を往き交う水面下での任務が彼に求められたか。従って（註）君臣関係の面でも京極家を始め深溝松平・岡部・生駒の大名家に対しては自由なる振るまいを保持していたと思われる。六年冬まで滞洛した。在京の間に、徳元は堂上家へも出入りしているが、なかならず北野連歌会（能通及び北野徳勝院の久園）や八条宮瘡見舞、源氏卷名発句の制作、あるいは師の里村昌琢に誘われて西撰有馬に入湯して「日発句」を成し、都三条衣棚町の貞徳宅を訪問するなどして、過ごすのだった。因みに昌琢との雅交は若狭在国時にまで遡るか（註）宗因筆「昌琢発句帳」。

滞洛中における、徳元の居所は多分、若狭守忠高邸であつたろう。その所在地は、島原図書館松平文庫に所蔵の『京都大絵図』（極大一舗、寛永頃成）によつて検すれば、善長寺町と鶏ほこノ町の通りが交差する辻の一角、すなわち綾小路通室町西、善長寺町に「京極若狭守」と見える。それは現在の、下京区四条室町下ル西に当たるとこ

ろ、池坊学園の辺りで、いわゆる京洛の中心街に在った。

△註1▽ 拙稿「徳元伝新考―寛永六年、東下前後のこと―」（下）（『書誌学月報』第28号所収、昭和61年10月、青裳堂書店刊）を参照。

△註2▽ 二木謙一著「大坂の陣」（昭和58年・中公新書）によれば、「忠臣二君に仕えず」といった主従間のモラルは、寛永期以前の武家社会に於てはあてはまらないであろう云々、と述べておられる（24頁）。

△註3▽ 拙稿「翻刻・宗因筆「昌琢発句帳」」を参照。同書夏の部に、

自若州所望

五月雨ハ沖中川のはまへかな

若州衆所望当座

秋をまで後瀬の山の下涼

と見える。右「若州衆」とは、京極忠高の家中を指すのか、ならば徳元に擬しておきたい。

○正月、徳元、前書に「寛永三暦のころ都に上り三四年在京せしうち発句」と記して歳旦吟に、花びらの餅（宮中カ）・試筆（二日）・謡初（二日夜）・東福寺・西陣の句（西陳に立春やをるはたのもん）を吟ず。

□「塵塚俳諧集」上

花びらの餅や九重けふの春

「花びらの餅」は「俳諧初学抄」に「花びら……又正月の餅のかざりにも有。」と、改造社版「俳諧歳時記」新年之部、菱葩餅の条には、「即ち薄く丸くのしたる白餅（葩）に、紅色菱形の薄い餅を重ね、味噌と午莠とを

包みて食するもの。新年朝儀に奉仕の者など頂戴する時には、二枚襲ねの白紙を二つに疊みたるものに一つく
挟みて下さるといふ。」(五九頁)と記す。鏡餅の上に薄い菱形の餅を重ねたところから「九重」に転じ、「九重」
は宮中・都の意、その縁で「けふ(今日・京)の春」と詠んだのであろう。因みに徳元は、(註1)この年九月十
三日に、将軍家の参内(『徳川実紀』)にともなうて、

禁中御庭へ物みにまかりて

鈴虫やないしどころ(※内侍所—宮中の温明殿うんめい殿の別称)の夕かぐら(『塵塚集』上)

なる句を詠んでいるのである。『若狭国伝記』(桜井曲全子著、宝曆ごろ成)には「……此徳元ハ始ハ京極ニ仕テ
当国ニアリ終ハ止ニ宮仕ニ」と記され、法名にも「前端尹(前東宮大夫)」なる唐名が見えることから、徳元の
「宮仕え」(あるいは御所出入の衆の一人か)については再考する要があるうかと思う。

参考までに、この年春の詠かと推定せられる新出「都花」和歌短冊一枚を紹介しておこう。(写真参照)



都花 九重の外までかくやにほふらん

花にかすめる都辺の空 徳元

右は伏見桃山在、友山文庫(中野莊次氏)蔵。白無地、縦卅六・四厘横五・八厘、新出の和歌であり、「九重の
外までかくや匂ふらん」と賞美している点に注目されよう。(昭六三・七・二実見)

からすみは筆こゝろみのさかな(着)哉

筆こゝろみ——春。正月二日の作である(『日次紀事』)。上五は「鱧子からすみならぬ唐墨は——」と読むのであろう。

「和漢三才図会」(寺島良安著、正徳二年五月自序)鱧はちの条に、「唐ノ墨 三一四一月鱧ノ子連ラ胞ななア乾スレ之形似レ墨ニ而大ク褐「色味甘「美ナリ」とある。

同じく二日夜には、謡初めの句。

松ばやしのくれもあやの小路哉

「松ばやし」は『初学抄』初春の条に「……謡初 松ばやし」と見える。又、「松林」の意も懸けている。因みに(註)服部茂兵衛宛、正保二年正月四日附徳元書簡の末尾にも、

二日謡初二

たちこゑや梅かえうたふ松はやし

とあるから、「松拍子の暮れも」で二日夜の謡初めを指すか。たゞし承応三年からは三日夜に行なつた。それから徳元が滞在したであろう京極若狭守邸は綾小路通に面してはいた。

あるいは、句意から推考ではあるけれど、それは当代における管弦の師範家、綾小路家あやのうぢを指しているのではないか。吉川弘文館刊『国史大辞典』第一巻を検すれば、「宇多源氏。代々郢曲(えいきよく、神楽・朗詠・催馬楽・今様など)・和琴・箏・笛などの師範家。鎌倉時代末期の経資が綾小路を称したが、その子孫は庭田を称し、綾小路の家名は経資の弟信有の子孫が称した。したがって家伝をはじめ普通には信有を始祖とする。戦国時代に

資能が出家して中絶したが、慶長十八年（一六一三）五辻之仲の男高有が家名を再興した。羽林家。江戸時代の家禄二百石。」（今江広道氏執筆）と記される。因みに当主は、『改正増補諸家知譜拙記』（大本五冊、文政三年二月板、架蔵）巻五を繙くに、高有、参議正三位、正保元年正月廿五日薨五十歳。逆算すれば寛永三年時には卅二歳。更に孤松子撰『京羽二重』（貞享二年九月刊）巻五には、「上立売室町西へ入ノ二百石」とある。されば徳元、上立売室町の綾小路高有邸に伺候し折柄「松囃子」を耳にしたらし、と推考は出来ないだろうか。

あた、かやでんがくあぶるとうふく（東福）寺

あた、か―正月（「はなひ草」四季之詞）。梅盛編『俳諧類船集』（延宝四年十二月刊）に、「田楽―豆腐」と。

『雍州府志』卷六土産門上・豆腐の条に、「……洛―下所―々ニ製レ之ヲ」と記す。従って読みは、あた、かや田楽あぶる豆腐食ふ、それに東福寺を懸けているのであろう。この年正月、徳元が詣でし京都五山の一、慧日山東福禅寺には、かつて批点を受けた近衛三貌院の墓所が現存（故あって大徳寺に改葬）、又、徳元の師昌塚もある年の夏に塔頭不二菴を訪れており、

於東福寺不二庵当座

夏なきハしけ木を四の隣哉

と連歌発句を詠んでいるのである（拙稿「翻刻・宗因筆「昌塚発句帳」」）。

〈註1〉『日次紀事』九月十三日・名月の条には、「今―夜―禁―裏多クハ有リ倭―歌ノ御会ニ供ニ茄―子ノ獻ヲ」とある。たゞし、この九月十三日の夜は雨天であつたらしい（『忠利公御日記写』）。

〈註2〉拙稿「柿衛文庫蔵徳元第三書簡考」（『連歌俳諧研究』第55号所収、昭和53年7月刊）を参照。

○一月頃、北野天満宮にて三萬句の俳諧が興行されたか。徳元、巻頭の発句を勤む。因みに廿五日は初天神。

□徳元短冊一幅

北野三万句之内ノ

巻頭 梅咲て天下は花の都かな 徳元

□『犬子集』巻第一 春上

北野にて

正直な梅のたちえや神ころ、 徳元

ほかに立圃撰『俳諧発句帳』（寛永十年刊）にも収録。この、「正直な梅の」句もこのころの作か。

まず（註）書誌。本短冊は徳元の曾孫たる、大坪本流馬術の師範定易（主税・青人、延享元年八十八歳歿）の

後裔斎藤定臣氏の所蔵になるものである。氏は福岡市中央区小笹一丁目九番一号に在住。軸装。縦三六・一糎、

横五・五糎。山水に梅花文様。

季語はむろん「梅咲て」で一月（『初学抄』『はなひ草』ほか）。かつ巻頭句でもあり（『天水抄』）、それは天神花に因んだもの。語句「花の都」は謡曲にも頻出。

さて、この年桜咲く頃に、徳元はこ、北野天満宮に詣でて連歌会に出座し、その満座に俳諧も興じている（『塵塚集』上、後述）。徳元と北野雅会、それは多分、社僧能通（寛永六年歿）、徳勝院の久園たちが暗に関係していたのかも知れぬ。能通との交流は（註）五年秋に、美濃大垣城主岡部内膳正長盛の華甲を祝う賦何路連歌一卷の折に一座。久園とは五年五月十八日の「山河」連歌一卷（昌琢発句）に一座する。なお久園の先代、徳勝

院久世はこの三年時に北野目代を勤めている（『北野天満宮史料・目代記録』78頁参照、同天満宮刊）。とすればそのような人間関係は寛永三年の春にまで溯るのではないか。

又、詞書中に「巻頭」と記されている点が、私の目を引く。それは、寛永三年前後における徳元の俳壇的地位について考察しようとする際の、一つの伝記資料となるからだ。巻頭句に関して貞徳は『天水抄』巻第二で、「発句一 貴人歎師歎」と記す。推測するに、北野初天神に奉納の俳諧三万句、その折、若狭から上洛して間がない彼ではあるが織田・京極両家につながる縁故からか、つとに八条宮御所出入りの衆であった（野間光辰先生『近世作家伝攷』収録、「仮名草子の作者に関する一考察」）し、加えて里村昌琢とも雅交を深めていたという俳壇的地位の高さが、徳元をして巻頭の座に据えたのではあるまいか。梅の花咲く初天神、天下は桜ならぬ面白の花の都やである。

参考までに、天神花を詠んだ新出の徳元短冊一枚を掲出しておく。

ある人天神の絵をもて来て発句を所望し侍れは

梅は薫し四方にあまみつ（※天満）神の春 徳元

右は金樹木模様の由。『尚古』昭和12年3月刊行の十一―十二号、短冊の部に所載。

〈註1〉拙稿「新出徳元短冊に関する覚え書」（『獅子吼』昭和46年8月号所収）を参照。たゞし旧稿の錯誤を訂した。

〈註2〉拙稿「長盛・能通・徳元一座『賦何路連歌』成立考など」。

○二月、徳元、西ノ洞院三条南、柳の水在の常真織田信雄邸に伺候したか。このころ、三条釜の座・柳の馬場等を訪れて句を吟ず。

□『塵塚誹諧集』上

かみのゆの柳の水やあらひ汁（洗ひ汁）

釜の座は柳の水を茶湯かな

「上のゆの柳の水」とは元内府織田信雄邸に在る井戸を斯く呼んだ。『京雀』（浅井了意作、寛文五年正月刊）巻第三に、

三条さがる

○柳の水の町 此町そのかみ織田常真公の御屋敷ありその井のもと名水にて餘所の水にはすぐれたり井の端に柳をうへられ茶の湯の水にはたくひなかりしを云々

と、同様な記事は『雍州府志』（黒川道祐撰、貞享三年九月刊）にも、

柳ノ水 在_二西ノ洞院_三條ノ南_二元ト内府織田信雄公ノ宅ノ井也_一斯ノ水至_テ清冷ナリ也植_ヘ柳_ヲ於_レ井ノ上_ニ避_ク日_一色_ヲ因_テ号_ス柳ノ水_一千ノ利_ヲ休_テ専_ラ賞_シ此ノ水_一點_ス茶_ヲ故_ニ茶_一人無_レ不_レスト云_{コト} 汲_レ之_ヲ

とある。更に「かみ（上）のゆ」とは上柳水（現在の柳水町北側と釜座町西側辺りに）のほうを指すのである。転じて「神・髪かみの湯」に、そして「ゆ柳」（『誹諧初学抄』）を言い懸け、髪に柳は縁語。従って解釈は上柳水なる名水「柳の水」で沸かした髪かみの湯で——、となるか。

さて、旧主秀信の叔父信雄と徳元との風交は、西洞院時慶の日記『時慶卿記』（京都府立総合資料館蔵本）に

散見されるのである。

寛永五年三月四日、一午刻 常真公へ八条殿（※智仁親王）御成 予（※時慶）毛御供申……（次間ニテ）：

……徳玄伺候

十六日、八条殿御能……常真……等也 此衆被相伴、（又椽ニ）……徳玄……等候

されば寛永五年桜咲く弥生の初めつかた、京都西洞院通三条下ル柳の水の町に構える、もと内大臣織田常真の邸宅からは時折、酒気を含んだ陽気な笑い声が聞こえてくる。常真は、信長の二男にして諱を信雄、叔父有楽斎からは茶道の奥義を極め、ほかに音曲舞楽にも嗜む文化人。四日午刻、彼の屋敷では、かの桂山荘の創始者八条宮智仁親王の御成で堂上家ならびに地下の数寄者たちが集まって、——多分、椿賞美の宴が催されていたのであろう。宴の顔触れのなかには徳元の姿も見えた。恐らく徳元は里村昌琢門下の連歌師としての資格、かつ旧主織田秀信の縁故につながる者として控えめに伺候していたであろう。趣向をこらした前栽には、今を盛りの椿の花百本を始め珍花名草各種、それは正に華麗なる寛永文化圏の典型を思わせるようであった。

私はこゝで、かつて中村幸彦氏が、『日本文学の歴史』7（昭四二・十一、角川書店刊）のなかで述べられたご論考の一節を想起する。少しく長くなるが左に引用してみることにしたい。

（こゝで、寛永文化圏と称するのは）……庶民とは区別されるこの時代の最高文化人の集団のことである。

（中略）他のもう一つは庶民の出や、僧籍にある、一芸一能の持ち主たち、和歌俳諧の松永貞徳、儒学の吉田素庵、書道美術の本阿弥光悦、同じく松花堂昭乗、茶道の安楽庵策伝などがまた一群を成し、この第三のグループは、その芸能をもって、第一（堂上歌人の一群）・第二（時勢に順応して活躍する儒人たち）のグループにと連絡していた。隠者の木下長嘯子、大名の小堀遠州、その他美術家や諸寺の高僧または富商で加えるべ

き人もあろうが、三グループを一つにしても、そう大きいものにはならない。これらの人々は、数寄と称した茶会や、花鳥風月のおりおりに出会しては、風流や学芸に興じていた。表芸は、上述したそれぞれのものであるが、教養趣味豊かに、みな和漢雅俗のさまざまな学芸をたしなんだ。

じつはこの一団こそ、古い中世以前の文化的伝統を濾過して、時代性を加え、近世社会にもたらしした濾過器であった。そのみではない、新興の文芸も、この人々のたしなみで洗練を加えたのである。同じたとえを続ければ、近世の新興社会へそれを引き出した口となったのが、庶民や僧侶などの、新興社会に直接位置した第三のグループである。運搬の係として、斎藤徳元・北村季吟・野々口立圃など（の）人々を数えあげてもよいであろう。（49頁）

すれば信雄との風交は寛永三年二月にまで溯ることが考えられようか。

「三条釜の座」は、柳の水町の信雄邸の東隣りに面した通りを言う。「京雀」には、

○釜の座 此町に茶の湯の釜を鑄ける上手どもあり町の南は三条通行あたり西ひがしの町をも釜の座といふ

……（巻第三）

と記す。中世以来、三条釜座町かまくらを中心に鑄物師たちが居住していた。釜と茶の湯も亦縁語である（『俳諧類船集』）。中七以下「柳の水を茶湯かな」については、掲出の記事を参照せられたし。

こきまぜて柳のいとやむすび花

結び花―末春（『俳諧初学抄』ほか）。上五「こきまぜて」は、古今和歌集卷一・春上に、「花ざかりに京を見やりてよめる／みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」をふまえたもの。

花よめや柳のばゞの孫むすめ

「柳の馬場」は、もと万里小路と呼ばれた。『京雀』巻第二に、

○万里小路 古しへ民の家居いまだ立統ざりし時此筋には柳おほく生つゞきしかば柳馬場通といふ

とある。柳馬場と遊廓については、『坊目誌』に、

天正十七年五月許可を得て此街二条の南北の地に遊廓を設置す。当時道路の左右に苦楝樹の並木を植う。俗に口称して柳馬場と呼ぶ

と記す。すれば天正十七年五月、徳元時に卅一歳の若さ。この前後、徳元は上洛して関白秀次に仕官する。因みに二条柳町の遊廓は、慶長七年（四十四歳）に六条三筋町へ移転した。柳に馬場は縁語（『類船集』）。「馬場」は又、婆。未だ遊廓が存在していた時分、「柳の婆」は二十歳代であつたらうか。対するに若き日の徳元の好色ぶりが想像せられよう。さて、ことし寛永三年六十八歳の春、徳元は卅数年ぶりにいまは傾城町の面影すらない柳馬場通を再訪してみる。と折しもそこに可愛らしき花嫁姿が眼にとまった。花嫁御は昔、艶聞を流したあの柳の婆、彼女の孫（馬子）娘であつたのか。

（昭六二・十二・廿九礎稿）